

日程	平成 22 年 2 月 16 日 13:15～14:15
訪問先	ユニー株式会社 アピタ千代田橋店
担当者	環境社会貢献部 國枝氏 アピタ千代田橋店長 後藤氏
バイオマス活用取組み概要	食品リサイクルの先進的な活動に取り組み、平成 19 年に食品リサイクル法施行以来初の「再生利用事業計画」を認定された。店舗では食品残渣から製造される飼料の安全性・品質を向上させるために、排出された食品残さを分別管理し、中部有機リサイクル株式会社へ供給している。

1. 説明内容

ユニー株式会社の環境活動

ユニー株式会社アピタ千代田橋店では、環境レポートを用いて、環境に対するユニーの取組みに関して説明があった（写真 1）。

ユニーは 2008 年、食品リサイクルへの先進的な取組みをした企業として「エコ ファーストの約束」を環境大臣と交わした。これは、全国初の再生利用事業計画を認定され、リサイクルループの



（写真 1）ユニー担当者からの説明モデルになったことによるものである。



（写真 2） 使用済み容器包装の回収場所

この約束では食品リサイクルの積極的な推進に加え、循環型社会の形成に向けた使用済み容器包装の店頭回収等についても具体的な目標を掲げ、回収を実施している（写真 2）。

また、家庭で使用されたてんぷら油を回収して BDF 化し、名古屋市のゴミ収集車の燃料として利用する新たな取組みを始めた（写真 3）。



（写真 3）使用済みてんぷら油の回収

食品リサイクルの取り組み

ユニーでは、食品廃棄物の発生抑制に関する目標に加え、食品リサイクル率を2012年度までに60%達成を目標としている。その取り組みの一つとして、現在は一部店舗に限られている食品リサイクルループを、2012年度には営業店舗所在地の19府県で実施することを目指している。

現状の食品廃棄物の発生量は、ユニー全体で約21,000t程度であり、これらの約4割を肥料化や飼料化に利用している。

肥料化によるリサイクルループの構築

ユニー(株)各店舗から排出された食品廃棄物を、再生利用事業者（一般廃棄物処理事業者）のもとで完熟堆肥としてリサイクルしている。堆肥はJAで使用され、収穫された野菜をアピタ店舗で販売することにより、食品リサイクルループを構築している。なお、堆肥は土壌改良を目的として使用され、畑1反あたり約1t程度使用されている。

リサイクルループの野菜は専用のコーナーに並べられ、リサイクルの取り組みを紹介している。にんじん、小松菜、カリフラワー、イチゴ、生姜など種類も豊富である。



(写真4)

店頭に並べられたリサイクルループの野菜

飼料化における民間事業者との連携

ユニーでは民間事業者と連携し、食品廃棄物の飼料化にも取り組んでいる。アピタ千代田橋店で発生した食品廃棄物は、昨年度より同市内の中部有機リサイクル株式会社で飼料化されている。

今後、食品リサイクルによる飼料で飼育された豚肉を販売し、リサイクルループの構築を目指している。



(写真5) 食品廃棄物の回収・分別場所

食品リサイクルにおける排出者側の課題

食品リサイクルに取り組むにあたり、排出者側に最も求められるのは廃棄物の適正な分別である。ユニーでは事業系ごみを19種類に分別しており、そのうち食品廃棄物は野菜・果物、パン、魚アラ、廃食用油の4つに分類している（写真5）。これらの分別方法をいかに従業員に指導するかが大きな課題として挙げられる。

また、廃棄物の削減に向け、ごみの計量器を2003年から全店舗に導入し、データを環境部の端末で一括管理している（写真6）。このような機器を全店舗に設置しているのは、ユニー独自の取り組みである。今後は、得られたデータを用いていかにごみ削減につなげるかといった施策を講じる必要がある。

2. 質疑応答

質問 1：リサイクルループ野菜の売れ行きはどうか。

回答 1：売れ行きは好調であるといえる。前日夕方に収穫されたものを翌日店頭に出すといった鮮度管理を徹底していることもあり、消費者の支持を得ていると考えられる。

質問 2：従業員への分別作業の指導はどのようにしているのか。

回答 2：当てはまるごみの分類に従ってすべて適切に分別することは困難であるため、特に重要なものをピックアップして優先的に分別するように指導している。例えば、ビニールの分類であれば「“きれいなビニール”と、“それ以外”」という形である。このように覚える項目を減らしたことで、従業員の戸惑いが減り、効率的に分別が出来るようになってきた。



(写真 6) ごみ計量器

3. 所感

食品リサイクルにおいて課題とされる、分別の煩雑さについての質問が多く挙げられた。単純に分別ルールを定めるだけでなく、従業員の立場に立った指導するという工夫を知ることができ、参考になったという参加者が多かった。このような排出者側の努力が、食品リサイクルにとって非常に重要かつ不可欠であると感じた。